維盛北の方の造型

郭　順伊

(一) はじめに
――『平家物語』の女性説話――

『平家物語』に描かれる女性説話は、源平動乱に自ずと巻き込まれ、不穏な時代に生きる女性達を主人公に、王朝的文学の雰囲気を多分に漂わせながら、過酷な戦を繰り返す男性達と緊密な関係にある女性らの物語が多く用意されている。女性達の終焉や晩年までも語る一章段として完成した『平家物語』の女性説話は、大半が後に増補されたもので、戦を中心に展開する殺伐とした世界に、潤いを持たせる役割を果たしているとの考えが一般的である。また、女性説話は『平家物語』に彩りを添えるためだけではなく、登場する女性のほとんどが出家の道を選択し往生を願っていることから、渥美かをる氏が以下のように『平家物語』における女性説話の位置付けに言及された(1)。

> 平家物語の女性は、恋に破れ、あるいは夫に死別し、または浮世の無常を観じて出家した人々で、そうした苦悩を契機として、当時人間最高の精神生活とされた尼の世界に身を投じたのである。これらは五障三従の女人もまた救われるということを、具体的な譬え話として作られたものと思う。

女性説話の導入を、物語全体の潤色としてのみ捉えるのではなく、出家という道が可能になった女性達の救済物語を、読者や聴衆に教示するためでもあると考えられたのである。『平家物語』の女性説話は物語の享受者である世間に対し、女人救済の可能性を明示する役割も担っていたと考えられるであろう。また、『平家物語』の女性達の多くは、戦に敗れた男性達の近親者であり、そうした女性達が、騒然とした源平動乱期の中で命を失った者たちの菩提を弔い、彼らとそして自らの極楽往生を願うために、終生をか

けた姿が共通して多く描かれていることも忘れてはならない。松尾葦江氏は、「彼女たちの余生を賭けての供養によって、非業の死を遂げた者たちが成仏する」と、夫や恋人や子供たちとの死別を契機に、出家する女性達の役割を述べておられる。(2)亡き者の供養をすることによって、同時に女性自らの往生も達成されるという特質が、『平家物語』の女性説話には見られるであろう。そして、女性説話の主人公達は、住む世界や身分に差異こそあるが、ほとんどが出家という共通要素を設けており、(3)そこに至るまでの経緯や物語の内容は個性的で、男性の登場人物に劣らないほどの特徴ある説話に完成したものであると考えられる。しかしながら、『平家物語』内に登場する女性達が全て前記したように、個性を放ち特徴ある確立された物語の主人公に設定されているとは限らない。本稿では、一章段の主人公に取り上げられることはないが、『平家物語』を通して見過ごすことの出来ない女性登場人物である、平維盛北の方に注目をしてみる。

(二) 平維盛とその妻

平維盛北の方は、物語内で言うまでもなく重要登場人物として挙げられる平維盛の妻である。覚一本では維盛の妻も前述した他の女性達のように、夫の死後出家の道を歩み維盛の菩提を弔う姿が描かれている。維盛北の方もまた、『平家物語』の女性説話の特徴、女性登場人物の役割を担っていると考えられるであろう。

夫である維盛が論じられる機会は極めて多く、平家の栄華、衰退、滅亡のいずれの時にも、父重盛、息子六代までを通して、維盛一族が物語中で主要な位置にあることは周知の通りである。その維盛の妻は、鹿谷の陰謀で平家打倒を企み、暗殺された藤原成親の娘である。自身もまた成親の妹を妻とする重盛が、鹿谷の処罰を穏便に済ませようと奔走した様子が、覚一本巻第二「小教訓」にも語られている。その成親の娘である維盛北の方が、『平家物語』の中で存在感を明確にしてくるのが、巻第七「維盛都落」以降の場面である。妻子を伴い都落ちをするのが常の状況下で、維盛は妻子を安全な場所に留めるため、ただ一人家族と離れ一門と共に都落ちをする決意を固める。都落ちしてから後の維盛は、家族に対する恋しさが増す一方となり、最終的には一門から離脱し、熊野沖で入水してしまうが、離れた妻子への恩愛に苦しみ続けるその姿は、既に戦線に立つ武士としての姿を失っていた。都落ち以降、入水に至るまで、維盛は離れた家族への情愛に思い煩う夫として、父親

としての姿で描かれ、「維盛の入水物語で主題化されるのは、往生にいたる道筋よりも、むしろ絶ちがたい恩愛の「妄執」それ自体」と、兵藤裕己氏が論じられたように[4]、都落ちから入水するまでの過程は、都に留め置いた家族への愛執に悩み続ける維盛の、苦悩する人間としての姿が前面に顕れたものである。そして、維盛の夫、父親としての面影が顕著に見られる時、当然の事ながら北の方や二人の幼子といった家族の存在が深く関わってき、長年連れ添った妻の姿が強調されてくるであろう。しかしながら、維盛北の方は物語内であくまで脇役としての立場にある。相当量を占める維盛描写の中で、維盛の妻は頻繁に登場するものの、その姿は合戦に臨む夫を気がかりに思い、常に涙する、非力な印象の妻としての表れでしかないのである。維盛北の方は、『平家物語』に描かれる他の女性説話の主人公達に比べ、特に目立った特徴や個性を持つわけでもなく、夫を慕うごく平凡な決まりきった形で描かれる傾向にある。もちろん、維盛という人物の物語全体に占める登場回数や、その重要性から幾度となく妻についての描写も確認できるが、その姿はどの諸本も、離れてしまった夫への恩愛と危惧の念を抱く薄幸な妻の姿が強調されたものである。維盛北の方に注目して物語が進行することはほとんどなく、あくまで愛執から逃れられない維盛に焦点を当てた際、その対象の妻が浮き上がるという状況なのである。一門からも離脱し、都に残した家族への恩愛が積もる維盛に対応する者として、北の方の存在が際立つのであろう。そのように、離れた夫を慕い続け常に悲愴感のある女性に語られる維盛北の方であるが、諸本間を比較してみるといくつかの相違点が生じてき、維盛北の方の別の一面を覗かせる描写があることにも気付く。夫を思慕する妻として、ほぼ一貫した描写で描かれる維盛北の方が、諸本間で見せるその差異について考察してみたいと考える。

(三) 夫維盛の都落ち

『平家物語』内で維盛北の方の存在が強調され始めるのは、維盛都落ちの章段からである。維盛が都落ちの際に妻子を伴わず、涙ながらに別れる愛別離苦の物語は、『平家物語』でも著名な都落ちの場面の一つであろう。源氏襲来の可能性がある前途不安のために、また妻が過去に打倒平家を企てた藤原成親の娘であるという、一門内の白眼視から妻を守るためにも、家族を都に残すことが最善だと考えた維盛は、自分の訃報に接しても出家などせず再婚をし、子供たちを養うよう妻に言い置くのである。その維盛の決

意を北の方は受け入れる事が出来ず、

都には父もなし、母もなし。捨られまいらせて後、又誰にかは見ゆべきに、いかならんひとにも見えよなンど承はるこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憐み給ふとも、又人ごとにしもや情をかくべき。いづくまでも友なひ奉り、同じ野原の露とも消え、ひとつ底の、みくづともならんとこそ契しに、さればさ夜の寝覚のむつごとは、皆偽になりにけり。せめては身ひとつならばいかゞせん。捨られ奉る身の憂さを思ひ知ッてもとゞまりなん。おさなき者共をば誰に見ゆづり、いかにせよとかおぼしめす。うらめしうもとゞめ給ふ物かな　（覚一本）[5]

と、「且はうらみ、且はしたひ」ながら、自らも都落ちに同伴したいと切に訴える。「都には父もなし、母もなし。」という北の方の父親は、かつて清盛によって処刑された成親であり、平家一門内における北の方の頼りのない孤独感が一層増す台詞であろう。他の諸本も、維盛と北の方が交わすこれらの会話はほとんど同形のものであり、長門本では、

日比は、心さしあさからぬやうに、もてなし給ひつれは、人しれすこそ、ふかくたのみたてまつりしに、いつのまに、かはりける御心こそうらめしけれ。いかならん所へも、ともなひたてまつりて、同野の露ともきえ、おなしそこのみくつともなりなん事こそ、本意なれ。ちゝもなし、はゝもなし。あはれをかくへき、したしきかたもなし。人をたのみたてまつるよりほかは、又、たのむ方なし。先世の契あれは、御身独りこそ、あはれとおもひ給ふとも、人ことに、なさけをかくへきにあらす。「いかならん人にも見えよ」なと、うけ給事の、うらめしさよ。別たてまつらん後は、又、たれにかは見え候へき。おさなきものとも、、うちすてられまいらせては、いかにして、あかし暮し候へき。誰か、はこくみ、たれか、あはれむへしとて、かやうに、とゝめをき給ふやらん　（長門本）

と、覚一本と同様に再婚を勧める維盛に対して「うらめしさよ」と嘆き、父親に捨てられた幼い子供たちの不憫さを訴えるのである。また、源平盛衰記も概ね同様の内容を記し、維盛の決断を覆そうと必死ですがる北の方の姿が確認できる。

哀自ら程に世に物思ふ者侍らず、父大納言に後れ奉りしより以来、明晩は心苦しきことをのみ見聞く孤子と成り、誰憐み誰育む。無慙と云ふ父もなく母もなし。

今は御方より外憑み奉る方なし。日来小夜の寝覚の昵言も、皆偽に成りはてぬ。いつより替り給へる御心ぞや。心憂や、先世の契にや侍りけん、人一人こそ哀不便と思召すとも、又見ん人はいかゞはあらんずらん。始めて人に見えん共思はぬ者をや、打捨てられ奉りて、堪へて有るべし共覚えず　（源平盛衰記）

これら諸本は、共通して北の方に夫婦の契りのはかなさも嘆かせている。「いづくまでも友なひ奉り、同じ野原の露とも消え、ひとつ底の、みくづともならんとこそ契しに、さればさ夜の寝覚のむつごとは、皆偽になりにけり」（覚一本）、「日比は、心さしあさからぬやうに、もてなし給ひつれは、人しれすこそ、ふかくたのみたてまつりしに、いつのまに、かはりける御心こそうらめしけれ」（長門本）、「日来小夜の寝覚の昵言も、皆偽に成りはてぬ。いつより替り給へる御心ぞや」（源平盛衰記）、都落ちに同行させないという夫の予想外の言動に、妻として一生涯を共にする長年の約束を裏切られた心持が語られる。天涯孤独の我が身と、幼子たちの今後の行方、長年連れ添った夫婦の恩愛に対する薄情さなど、あらゆる言葉の限りを尽くし泣きすがる姿に、夫と離れ離れになった妻として、都に取り残された妻の不幸を一身に背負う女性像として、『平家物語』が語る維盛北の方の基本的性格が確認できる場面であろう。

この都落ちの際に、維盛北の方は「いかならん人にも見えて、身をもたすけ、おさなきもの共をもはぐゝみ給ふべし。情をかくる人もなどかなるべき」（覚一本）と、維盛自身に再婚を促されるのである。その維盛に対して、「捨られまいらせて後、又誰にかは見ゆべきに、いかならんひとにも見えよなンど承はるこそうらめしけれ」（覚一本）と北の方は反論する。維盛の妻が史実として維盛の死後、吉田経房のもとへ再嫁した事実は、『尊卑分脈』や『三長記』などに記されており、[6]さらに日下力氏が、経房の建立した浄蓮華院の供養の様子を記した「堂供養之事」と称される資料を挙げ、維盛の元妻と経房との関係を詳細に論じておられる。[7]維盛の妻が他の男性と再婚した事実は覚一本では全く語られず、北の方は維盛の死後出家をし、息子六代が源氏に捕らわれるまで、京都嵯峨の大覚寺に隠れ住んでいたという内容になっている。これは、覚一本が維盛北の方の再婚という史実を虚構した形で語っていることになる。[8]他の諸本では維盛の妻が出家をしたというような内容には触れておらず、全く事実と異なった筋書きを用意しているのは覚一本のみである。さらに、源平盛衰記にいたっ

ては維盛都落ちの場面で、

> 留め置き奉るは、誠に情なく思召すらめども、維盛は遠き情をこめ奉りて、かくは相計へるなり。後には賢くも計りて、棄置きけりと思召し合する、御事も有るべし。
>
> （源平盛衰記）

との源平盛衰記独自の維盛の台詞を設けており、この記事に関して日下力氏は「後日の再婚を明らかに予言した言葉を書き加えている。物語の表現は、北の方が再嫁した事実を踏まえて成り立っていたのである。」との見解を述べておられる(9)。源平盛衰記のみが維盛北の方の再婚を予感させる記述を残し、再婚の事実を踏まえた物語に設定したと考えられるであろう。また、鈴木彰氏は源平盛衰記の同箇所の記述から、「遠き情」の表現に注目した論文の中で、

> ここで維盛は、妻子を都に留めおくことは、自分が「遠キ情」すなわち将来のことも考慮した愛情を持てばこその判断であって、後にこの判断の賢明さを解することもあろうと述べる。
>
> その言葉は、ある事態に直面した中での理解や判断は絶対的なものではないという、〈今〉と〈後〉における人の心の差異または変化の可能性をとらえたものといえる。
>
> （中略）『盛衰記』は彼の心中を「遠キ情」という語で明示し、事態に直面した状況という条件と、〈今〉と〈後〉との対比という観点において維盛の言動を特に焦点化し、際だたせたのである。

との考えを述べておられ、また、源平盛衰記に対し「時間と状況の推移に伴う人間の変化を見すえるまなざし」が、根付いているとの評価をされている(10)。維盛北の方の再婚を予測する言葉は、再婚の事実を前提に物語が成り立っている事の証明だけではなく、再婚を促す維盛とそれを拒否する北の方、そして維盛の言葉通り、後に再婚をした史実の北の方を踏まえて、変遷する人間の心情を維盛の言葉に託して言及しているとの解釈が出来るであろう。

（四）馴れ初め説話にみる一面

維盛の都落ちにあたって、耐え難い夫との別れを強いられた維盛北の方であるが、延慶本、長門本、源平盛衰記などは、維盛の都落ちと同時に維盛夫妻の馴れ初め物語を描いているのである。この夫婦の馴れ初めは、覚一本には導入されていない物語である。覚一本は単身都落ちを決意した維盛に対する妻の悲嘆を、維盛と家族の決定的な別離である「維盛都落」の章段に一括してまとめて語り、維盛夫

妻の馴れ初め物語を省略して、都落ちに関する別離の場面のみを、凝縮し整えた形にしている。しかし、他の諸本は維盛の都落ちに纏わる物語を〈維盛都落ちの決意と妻の嘆き〉〈維盛と家族の別れ〉の内容に二分割し、回想風に挿入された馴れ初め説話を、長門本、延慶本は二分割した前半部〈維盛都落ちの決意と妻の嘆き〉に設け、源平盛衰記は後半部〈維盛と家族の別れ〉に該当する都落ち直前の場面に設定している。覚一本以外の諸本に記される維盛夫妻の馴れ初め物語を、やや長文ではあるが以下に長門本から引用する。

この北の方と申すは、中御門新大納言成親卿の御むすめなり。ようかん世にこえて、心ゆうにおはします事も、よのつねにはありかたし。かゝりけれは、なへての人に見えむ事、いたはしくおほされて、「女御きさきにも」と、ちゝは、おもひ給けり。かくきこえければ、人々、あはれとおもはぬはなかりけり。法皇、このよしきこしめして、御色にそめる御こゝろにて、しのひて、御書ありけれとも、「これもよしなし」とて、御返事申させ給はす。

雲井より吹くる風のはけしくて涙の露のおちまさるかな

と、くちすさひ給けるこそ、やさしけれ。父成親卿、法皇の御書ありけるよしきゝ給て、あはてよろこひ給けれとも、ひめきみ、あへてきゝ入給はねは、「親のため、不孝の人にてまし〳〵けるや。父子の儀、思けるこそくやしけれ。今日より後は、父子の契、はなれたてまつりぬ。御方へ、人、行かよふへからす」との給ければ、上下おそれたてまつりて、かよふ人もなし。めのとこの、兵衛佐と申ける女房一人そ、わつかにゆるされて、かよひける。これにつきても、ひめきみは、世のうき事を、御もとゆひにて、すさひ給ける。

むすひつるなけきもふかきもとゆひにちきる心はほとけもやせし

とかきて、ひきむすひて、捨給ひけり。兵衛佐、是をみて後にこそ、思人ありとも、しりにけれ。色に出ぬる心の中を、いかてかしるへきと、さま〳〵諫申けるは、「女の御身とならせ給ては、か様の御幸をこそ、神にもいのり、仏にも申させ給て、あらまほしき御事にて候へ」と申けれは、姫君、涙ををさへて、「我身には、人しれす、おもふ事あり。いくほとならぬ夢まほろしの世の中に、つきせぬおもひの、つみふかければ、何事も、よしなきそよ」とて、引かつきてふした

まふ。兵衛佐、申けるは、「おさなきより、たちさるかたもなく、なれみやつかひ奉るに、かく御心をゝかせ給けるこそ、心うけれ」と、さま〳〵に、夜もすから、うらみ奉りけれは、姫君、まけて「ありし殿上人の、ゑんすいに、見そめたりし人の、ひたそらこと顕て、いひし事を、きかさりしかは、此世ならぬ心の中を、知せたりしかは、いかはかり、かくときかは、なけかむすらんとおもひてそよ」と、の給へは、「小松殿のきんたち、権亮少将殿こそ、申させ給ふときゝしか。偖は、其御事にや」と、兵衛佐おもひて、小松殿へ、しのひてまいりて、「しか〳〵の御事」なと申けれは、少将、「さる事あり」とて、しのひやかに、いそき御車をつかはして、むかへ奉りけり。（長門本）

この馴れ初め物語は、延慶本や源平盛衰記もほぼ同様の内容を記しており、維盛の許を訪れた兵衛佐が、「急ぎ小松殿へ参りて、北の御方に然々の御事なん申したりければ」（源平盛衰記）と、まずは維盛の母親に報告したという相違点が源平盛衰記に確認できるのみである。後に増補された創作物語であろうとも考えられるが、成親の娘である維盛北の方は、維盛と夫婦になる以前、その美貌ゆえに後白河法皇に見出され文を贈られるほどであった。返事を拒む娘に立腹した成親は親子の縁を切り、兵衛佐という女房のみ仕える事を許して、娘を隔離してしまうのである。

この馴れ初め物語において僅かではあるが、覚一本にはない北の方の一側面が見られるのではないだろうか。確かに馴れ初め説話に関しても、最終的には兵衛佐が北の方の胸中を察し行動を起こすなど、北の方自身の消極的な大人しい雰囲気が見受けられる。それは維盛都落ちの場面にも確認できる脆くか弱い印象と重なるであろう。しかしながら、終始誰かに付き従うだけかというとそうではない。維盛を慕い法皇の申し入れを退けるその心中や、父親の命に逆らい従順である事を拒否する姿勢は、決して揺らぐことなく、父親の激怒に対し寡黙に一心に維盛を慕う強さのようなものを感じるのである。はかなげで弱々しい涙に暮れる妻の姿とはまた別に、どのような状況に追い込まれても、忍耐強くその場に留まり、しかしながら決して心変わることのない静かな強さが、維盛北の方の馴れ初め物語から窺える一面であろうと考える。

（五）北の方の文

次に取り上げる場面は、都落ちした維盛の元に届いた妻からの手紙である。前述した通り、維盛は妻子を残して出

立したものの、月日が重なる度に家族への恩愛、愛執の気持ちは増してゆき、都を恋しがる望郷の思いは一門を裏切り源氏側に寝返るのではないかと疑惑をかけられるほどであった[11]。その維盛の許に届いた北の方の手紙の内容を、諸本間では源平盛衰記が最も詳細に記し、その他の諸本は具体的な記述を避け、簡潔に述べるに留まっている。以下に覚一本、延慶本、長門本、源平盛衰記の引用を並べてみる。

○さるほどに小松の三位中将維盛卿は、年へだゝり日かさなるにしたがひて、ふる郷にとゞめをき給ひし北方、おさなき人々の事をのみなげきかなしみたまひけり。商人のたよりに、をのづから文なンどのかよふにも、北方の宮この御ありさま心ぐるしう聞き給ふに、さらばむかへてひとところでいかにもならばやと思へども、我身こそあらめ、人のためいたはしくてなンどおぼしめししのびて、あかし暮らし給ふにこそ、せめての心ざしのふかさの程もあらはれけれ。（覚一本）

○権亮三位中将ハ、年隔タリ日重ルニ随テ、故郷ニ留メ置シ人々ノ事ノミ無穴倉恋クゾ被思ケル。商人ノ便ナドニ自ラ文ナムドノ通ニモ、北方ハ、「相構テ迎取給へ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」ナムド、細々トカキツヾケ給ヘルヲ見給ニ付テモ、「アワレ、迎取奉テ一所ニテトモカクモナラバ、思事アラジ」ト、思立給事ヒマナケレドモ、人ノ偽イトヲシケレバ、思忍テ日ヲ送ル。

（延慶本）

○権亮三位中将惟盛は、としへたゝり、日かさなるにしたかひて、古郷にとめをしき人々の事をのみ、こひしくおほされて、あき人のたよりなとに、をのつから文なとの通にも、北方は、「かまへて、むかへとり給へ。おさなき物とも、なゝめならすこひしかりたてまつる。我もつきせぬなけきになからふへくもなし」なと、こま〱とかきつゝけ給へるを見給ては、「むかへとりて、一所にて、ともかくもならはや」と思給事は、ひまなかりけれとも、人のためいとをしけれは、思しのひて、日をゝくらる。（長門本）

○三位中将維盛は、日重り年阻りぬるに随ひて、故郷に留め置きし人々も戀しく聞かまほしく思召しけるに、適商人の便を得て、北の方より御文あり。珍しとて抜き見給へば、相構へて迎へ取り給ふべし。人しれず歎き悲む心の中、争でか知らせ奉るべきとまで、責ての事には覚えて候、只推量り給ふべし。少き者共の斜ならず戀しがり奉れば、我身の盡せぬ思ひに打副へて、

為方なく思へば、ながらへ候ふべし共覚えす。①生きて物を思ふも苦しければ、消えも入りなばやと思へども、又憂世に立廻らば、などか今一度見もし見えもし奉る事なからんと難面き心につながれて、今迄はかくて侍れども、遂に如何なるべし共思ひ分かず。②若し昔語とも成りなば、少き人々の父にこそ捨てられ奉らめ、母にさへ後れて、憑む方なき者と成りて、誰に育まれ奉らんと。かねて思ふも悲しくこそ侍れ。③さても如何に只一人は御座しまし候ふなるぞ。心苦しくこそ、如何ならん人をも相語らひ給ひて、旅の御徒然をも慰め給へかし。契はそれにしも依るべきかはと、濃かに書き給ひたりければ、最悲しく覚えて、伏沈み給ひけるこそ、哀れに見え給ひけれ。　(源平盛衰記)

覚一本の手紙の内容が、「北方の宮この御ありさま」とだけ記され、北の方の心情が一切伝わってこない、最も簡略化された文言だけとなっている。北の方の様子がほとんど把握できず、手紙を受け取った維盛が、「心ぐるしう」思う内容であった事の想像のみしか出来ない記述と言えるであろう。延慶本、長門本は覚一本より多くの言葉を費やしてはいるが、「北方ハ、「相構ヘテ迎取給ヘ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」ナムド、細々トカキツヾケ給ヘル」(延慶本)、「北方は、「かまへて、むかへとり給へ。おさなき物とも、なゝめならすこひしかりたてまつる。我もつきせぬなけきになからふへくもなし」など」(長門本)とあるように、残された身の辛さを訴える内容が、短い言葉で簡約され記されている。

そして、維盛北の方が夫に宛てた手紙の中身を、最も詳細に記すのは源平盛衰記である。「相構て迎へ取り給ふべし。人しれず歎き悲む心の中、争でか知らせ奉るべきとまで、責ての事には覚えて候、只推量り給ふべし。少き者共の斜ならず戀しがり奉れば、我身の盡せぬ思ひに打副へて、為方なく思へば、ながらへ候ふべし共覚えす。」(源平盛衰記)などに見られる、一刻も早く維盛と再会したい願いと、同じく父親を恋しがる幼子の存在を訴えた内容は、延慶本や長門本にも共通する事柄である。都落ちの場面で散々に嘆き悲しんだ維盛の妻子は、都落ち以後もその状況に変化はなく、維盛と同様に離別の期間が長くなる程に、悲痛な叫びも増す一方なのであろう。維盛の妻は既に、「ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」(延慶本)、「我もつきせぬなけきになからふへくもなし」(長門本)、「生きて物を思ふも苦しければ、消えも入りなばやと思へども」(源平盛衰

記）というように、維盛との別れを生きながら、悲しみ耐え抜く限界を悟っている様子である。唯一の信頼できる支えが維盛であった妻は、今まさにその維盛さえ失う喪失感にさいなまれ、自らも生き永らえる自信を無くしているのであろう。そのような状態をより多くの言葉を費やし、維盛北の方の心中を手紙に託し語らせているのが源平盛衰記である。引用文中②には両親を失った後の、子供たちの将来を懸念する言葉がある。以前に一人都落ちを決意した維盛に対して、「父大納言に後れ奉りしより以来、明晩は心苦しきことをのみ見聞く孤子と成り」と自分自身を語ったように、父親と母親が既に他界した北の方にとって、自身が抱えた両親のいない不安や孤独を、同じように我が子にも与えてしまう母親の胸中は辛く苦しい思いであろう。

そして、①に見られるように維盛との再会の可能性を信じ、これまで生き延びてきた北の方が、「難面き心につながれて、今迄はかくて侍れども、遂に如何なるべし共思ひ分かず」と、維盛と再会できる望みを失いかけている限界が、源平盛衰記には記されている。さらに、③においては妻と離れ孤独である維盛に対し、「如何ならん人をも相語らひ給ひて、旅の御徒然をも慰め給へかし」と、維盛に対して新しい妻をその地で迎えるよう提言するのである。③のような北の方の言葉は他の諸本には見当たらず、源平盛衰記独自の記事とされる。①や③の記述からは、維盛北の方が以前のように、家族揃って過ごせる望みに諦めを感じているようにも窺えるであろう。現在置かれた事態が変化するとは思えず、夫と離れて過ごす日々をこれから先どれほど耐え忍んだとしても、「遂に如何なるべし共思ひ分かず」と、既にどうにもならない状況を、絶望的な思いで迎えており、そばにいる事の出来ない我が身の代わりに、別の女性を現地で見付けるよう提言するなど、維盛と再会出来る望みを信じるよりも、このまま別離してしまう可能性を実感しつつある妻の失望感が伝わってくるようである。覚一本や長門本では再会の望みを支えに、沈痛な思いでひたすら願い待ち続ける北の方の姿が推し量れるが、源平盛衰記にはそれだけではない、半ば維盛との再会を諦めかけているような、待ち続ける身の限界に達した本音が描かれているようである。純粋にひたすら再会を願い待つという姿よりも、より生々しい北の方の感情が、源平盛衰記の維盛への手紙に託されていると言えよう。覚一本や長門本が手紙の内容を短い言葉で一応説明するのに対し、源平盛衰記はより多くの言葉を並べた手紙の文面を通し、北の方の心中を語ろうとしている。その内容は、ただ待つことしか

出来ない哀れな妻の姿に留まらず、他の諸本では知り得る事の出来ない維盛北の方のより多くの苦悩を語らせている内容なのである。

（六）おわりに

以上のように、再婚の事実を伏せ、出家という道を維盛の妻に歩ませた覚一本は、維盛北の方という人物に、『平家物語』の他の女性説話と同様、出家、亡き者の菩提を弔うという過程を当てはめ、脇役である維盛北の方も、『平家物語』における女性説話の特質に、沿った描き方をしているのである。さらには、維盛の妻自身の性格設定も、都落ちで見せたか弱い印象を基本に設け、北の方の積極的な自己主張や、目立った言動は語られる事がなかった。胸中を窺い知る事の出来る手紙でさえ、決して多くを語ろうとせず、覚一本における北の方の人物像は、ますます稀薄で標準的なものでしかなかったのである。そのような印象を読者に与えながら、維盛北の方に関する記事は、覚一本の整然とした物語の構成に、組み込まれていったと考える。一方、他の諸本では維盛夫妻の馴れ初め物語を置くなど、維盛北の方の持つ静かなる強さといった、別の側面を確認することが出来た。また、源平盛衰記では、他の諸本が触れる事のなかった維盛北の方の再婚を予感させる言葉を残し、史実を踏まえたうえで維盛都落ちの物語を成立させている。実際に再婚をした北の方の、時間と共に経過する心の変化にも維盛の台詞を通して言及することで、北の方の内面により深く迫り、真実を描き出そうとする意識が窺えるのである。北の方の心情を詳細に描き出そうとする傾向は、維盛に宛てた手紙の内容からも読み取れ、ただ夫を慕い、待ち続けるだけの決まりきった形式の妻の姿ではなく、諦めや失望といった様々な苦悩を語らせる事で、覚一本に比べ源平盛衰記の維盛北の方は、より写実的に描かれた人物像が窺えると言えるであろう。

（注）

（1）渥美かをる氏『平家物語の基礎的研究』（笠間書院、一九七八年七月）。

（2）松尾葦江氏「女性説話による平家物語の考察――平家物語と太平記の間――」（『湘南文学』第十六号、二〇〇三年一月）。

（3）祇王、仏御前、千手、内裏女房、大納言佐、横笛、建礼門院徳子など、覚一本に拠ると全員が出家をしており、唯一、小宰相のみが出家をせず、戦死した夫の後を追い入水自殺をしている。

（4）兵藤裕己氏「平家物語における「罪」のテーマ――平維

盛・重衡・建礼門院の物語——」（『湘南文学』第十六号、二〇〇三年一月）。

(5) 本文の引用は以下のテキストを使用し、適宜傍線を施した。
○覚一本…『新日本古典文学大系　平家物語』（岩波書店）。
○延慶本…『延慶本平家物語』（勉誠社）。○長門本…『長門本平家物語の総合研究　校注篇』（勉誠社）。○源平盛衰記…『源平盛衰記上・下』（芸林社）。

(6) 『尊卑分脈』成親女子「経房卿室元維盛卿室」。『三長記』（建永元年八月九日条）「或人語云、去比頭亮嫁維盛女、〈中将實宣朝臣舊妻、母故経房卿後家也、〉知行院御領一所、即被召件御領了云々、件女可宮仕之由内々申入、而婚嫁之間被咎仰歟、無為親國朝臣面目歟」（〈　〉内は割注）。なお、『三長記』には平親国と結婚した維盛の娘の母として、維盛北の方が「故経房卿後家也」と記されている。

(7) 日下力氏「後白河・四条朝の平氏——維盛北の方の再婚と定家の人脈——」（『国文学研究』第百十四号、一九九四年十月）。

(8) 「中にも小松三位中将殿若君、六代御前とておはすなり。平家の嫡々なるうへ、年もおとなしうましますなり。いかにもしてとり奉らんとて、手を分てもとめられけれ共、尋かねて、既に下らんとせられける処に、ある女房の六波羅に出て申けるは、「是より西、遍照寺のおく、大覚寺と申山寺の北のかた、菖蒲谷と申所にこそ、小松三位中将殿の北方・若君・姫公おはしませ」と申せば時政やがて人をつけて、其あたりをうかゞはせける程に、ある坊に女房達、おさなき人、あまたゆゝしく忍びたるていにてすまゐけり。」（覚一本巻第十二「六代」）。

(9) 注（7）に同じ。

(10) 鈴木彰氏「維盛の「遠キ情」を読む——『平家物語』と『源平盛衰記』のあわいから——」（『日本文学』第五十四号、二〇〇五年十一月）。

(11) 「三位中将の給ひけるは、「さればこそ、人なみ〳〵に都を出て、西国へ落くだりたりしかども、ふるさとにとゞめをきしおさなき者共のこひしさ、いつ忘るべしとも覚えねば、その物思ふけしきの言はぬに、しるくや見えけん、大臣殿も二位殿も、「此人は池の大納言のやうにふた心あり」なンどとて、思ひへだてたまひしかば、あるにかいなき我身かなと、いとゞ心もとゞまらで、あくがれ出て、是まではのがれたる也。」（覚一本巻第十「高野巻」）。都を恋しがるあまりに宗盛、時子らから、平家を裏切り都に留まった池の大納言頼盛のように、源氏側に寝返るのではないかと疑いをかけられていた事を、一門から離脱した理由として維盛が自ら語る。